

524  
442

九州横断阿蘇登山記

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

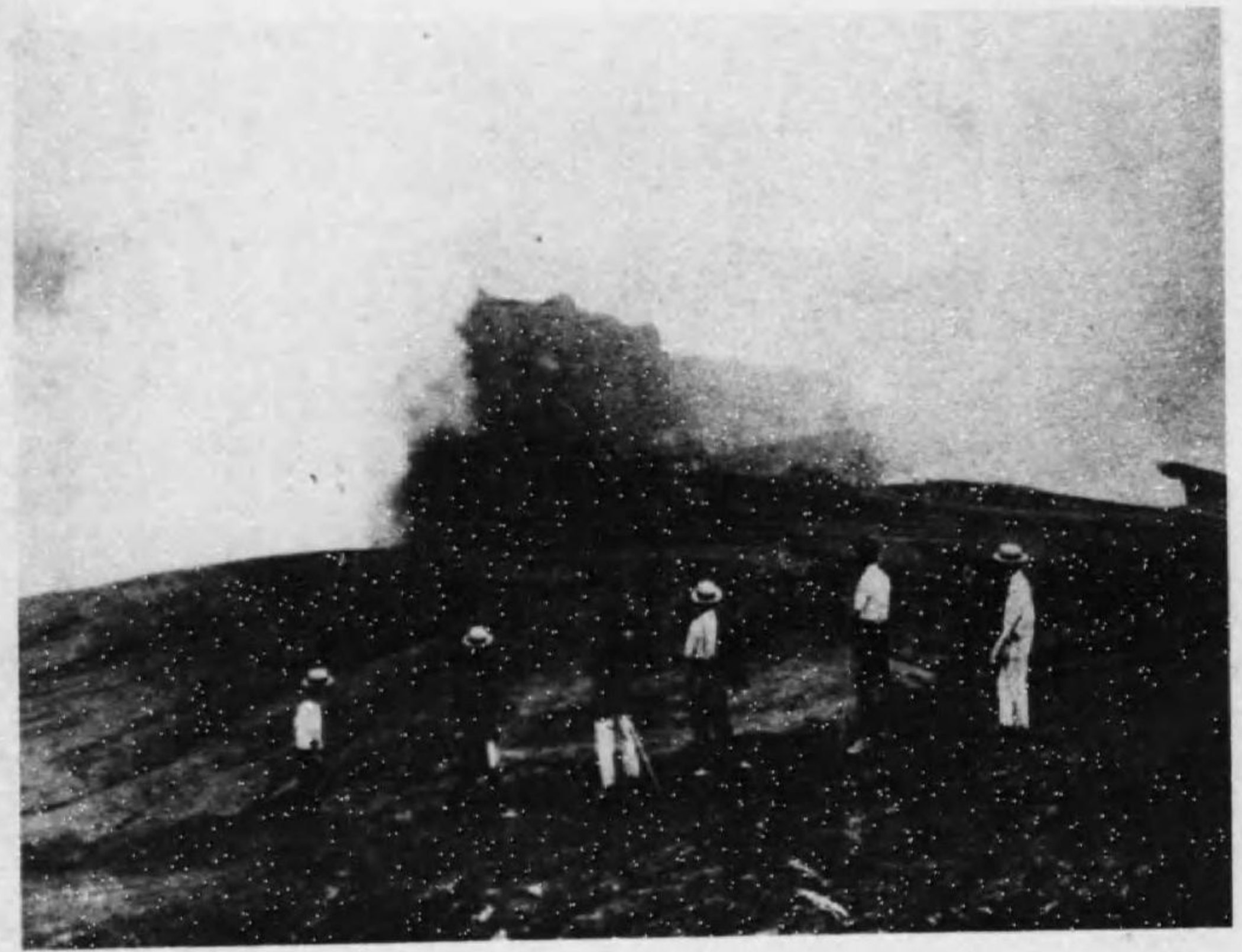
始



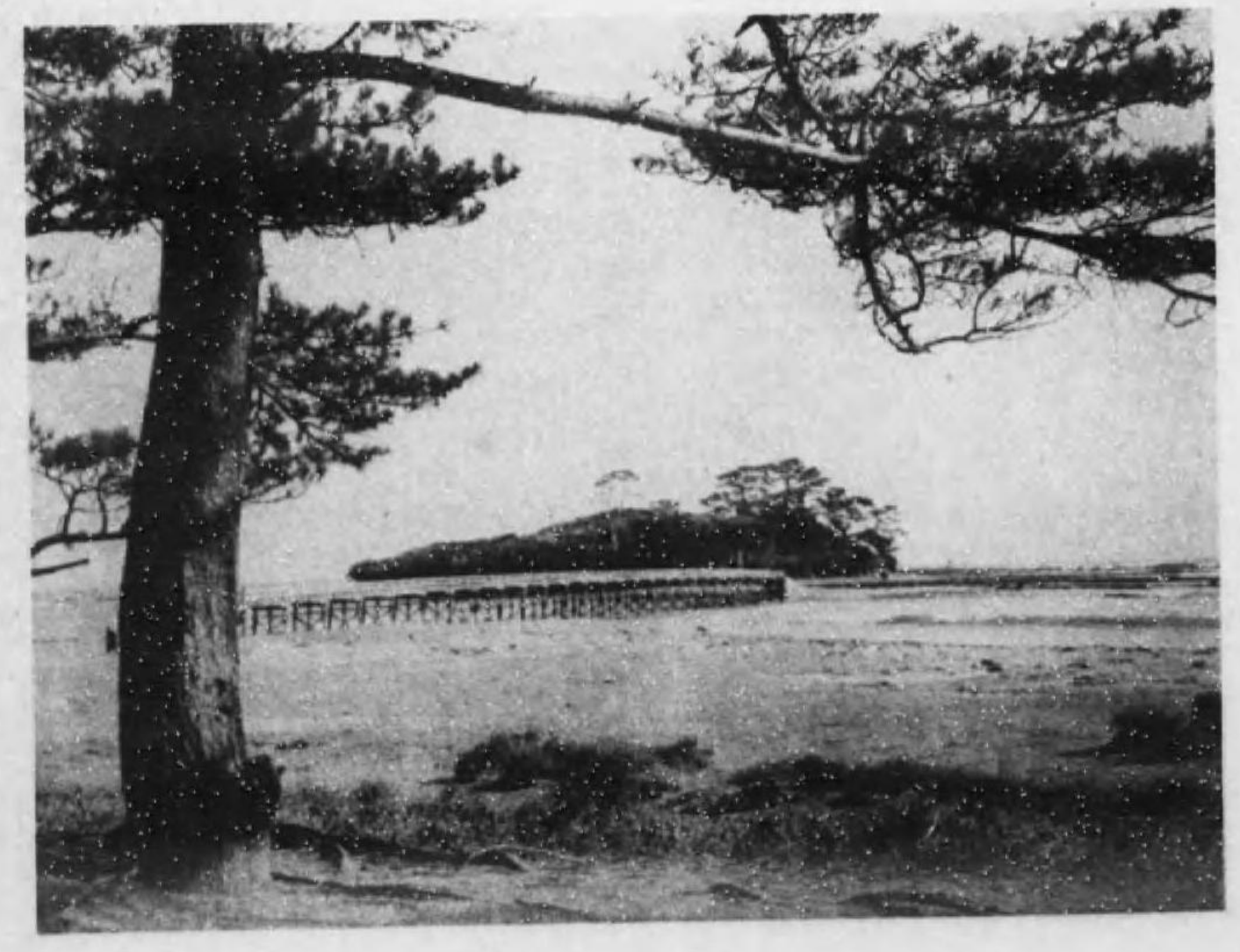
九州橫斷阿蘇登山記

阿蘇山頂噴烟

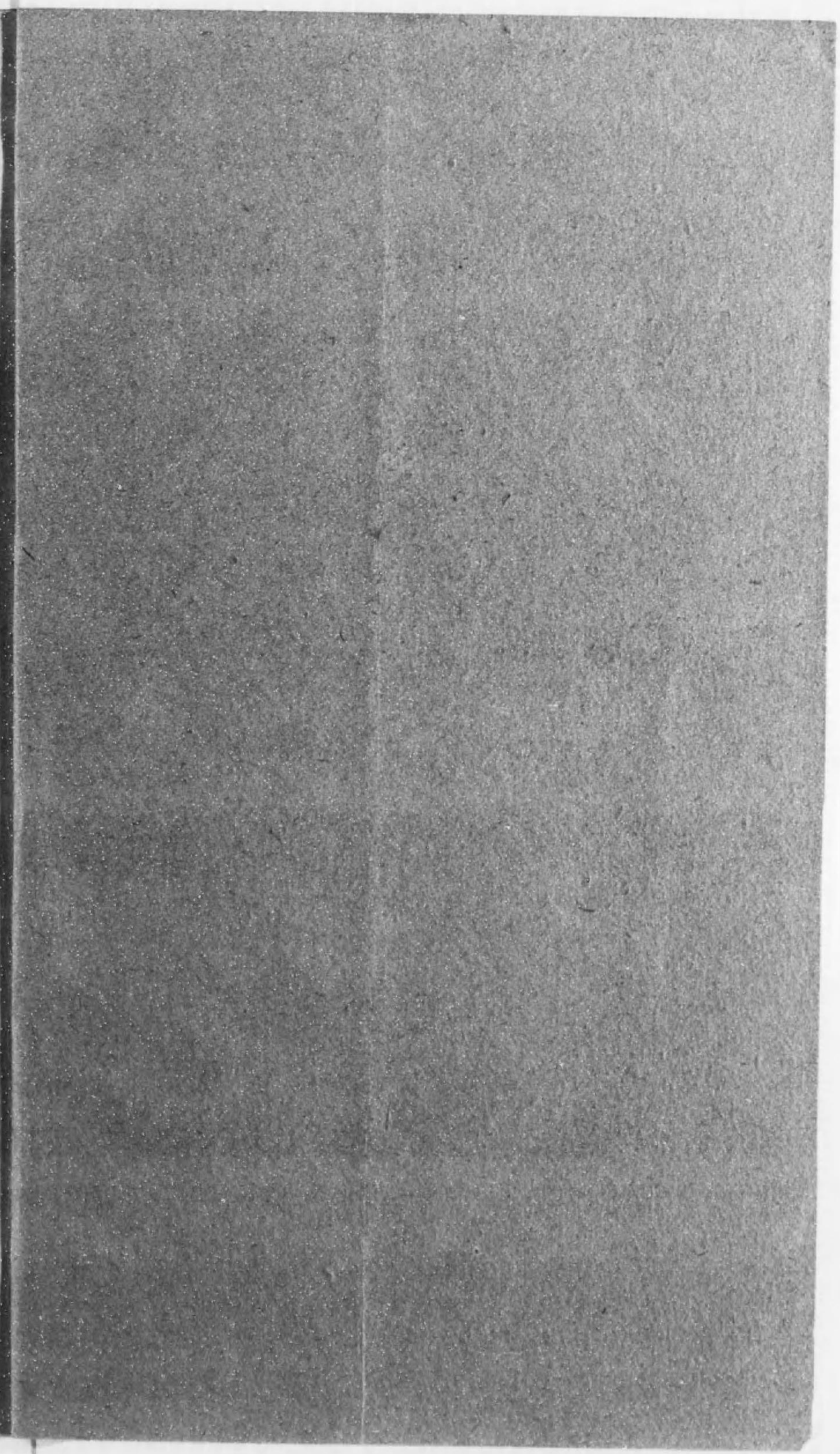
左ハ主噴火口



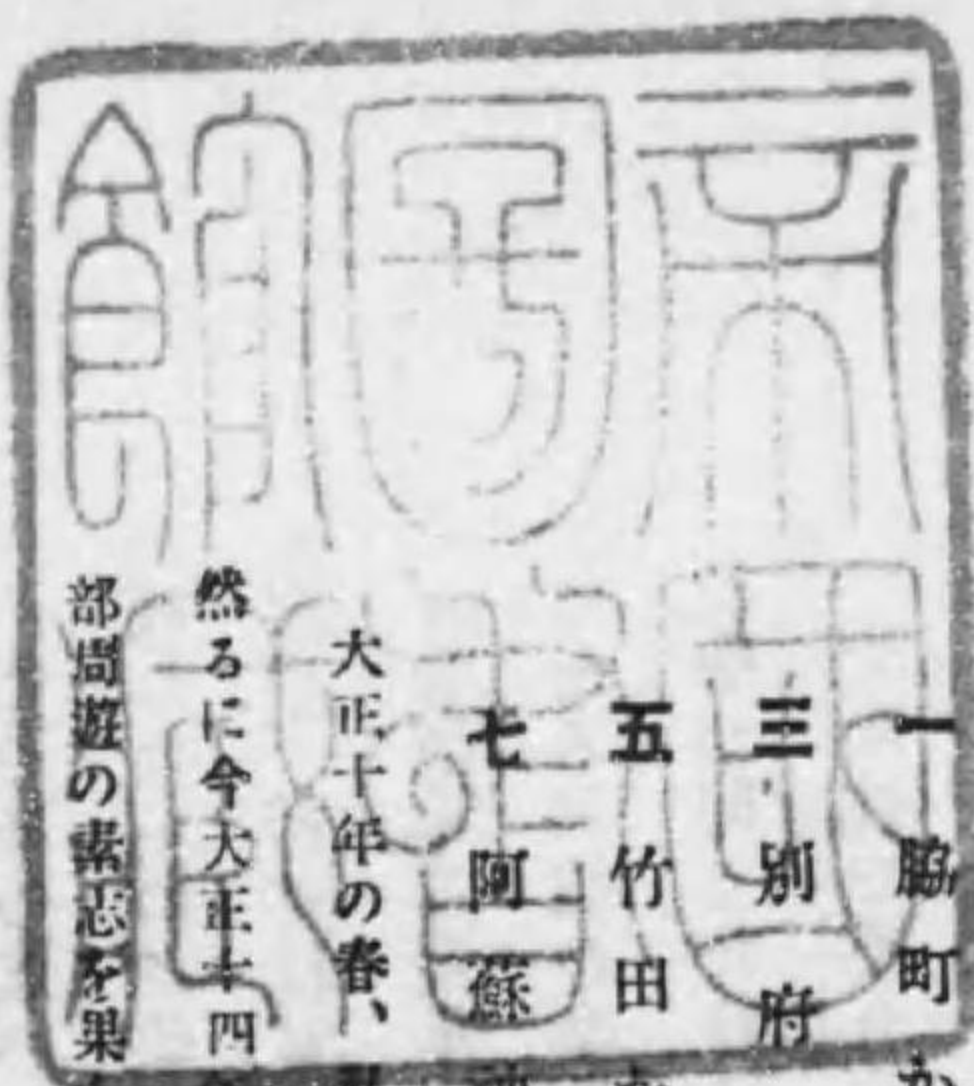
右ハ新噴火口



日向青島遠望



524-442



# 九州横断阿蘇登山記

笠井新也 寄贈本

笠井新也

一 脇町から高松へ  
三 別府 温泉  
五 竹田から宮地へ  
七 阿蘇神社参拜

二 むらさき丸  
四 大分から竹田へ  
六 阿蘇登山  
八 宮地から熊本へ

大正 15. 3. 16 寄贈

大正十年の春、私は九州の北半部を旅行して、その地理、史蹟、土俗等を視察したが、その南半部はなほ全く未知の境であった。然るに今大正十四年の夏、五高に開催される講習會に出席のため、熊本へ出張を命ぜられたので、私はこの機を利用して、九州南半部周遊の素志を果したのである。本篇は即ちその紀行の一部である。本篇は、最初「九州横断半周記」と題して、七月二十五日から、八月九日に至る旅行全部の日記を書きつくりであったが、阿蘇登山の記事が非常に長くなつたので、俄に豫定を變更して、本篇の如きものとしたのである。巻頭に掲げた日向奇島の寫眞の如きも、この豫定變更によつて、全く贅物となつて了つたのは遺憾である。然し本篇に書殘された、熊本から鹿兒島、宮崎を巡つて別府にかへつた迄の記事、少くとも日向奇島に関する記事は、更に機會を得て發表したいと思つてゐる。讀者幸にこれを諒せられたい。

## 一 脇町から高松へ

二

七月二十五日

午後四時、待つてゐた高松行の自動車が出来たので、直に乗込む。

この時の私の服装、まづ帽子は、安物ながら今度の旅行の爲に新調した麥藁帽子、眼鏡は、セルロイドは旅行用に適しないので銀縁、洋服は洗濯したばかりの白い麻地、それに赤革の靴を穿きこんだ。手荷物は中形のトランク一箇だけ。洋傘は私の主義として、いつもの旅行の通り、持たなかつた。

自動車は發車すべくけた、ましい爆音をあげる。振返つて見ると、家の柵際には妻の母と、妻と、それに今年四つになる姉嬢の卑彌子とが坐つてゐる。庭には女中が、この三月に生れた暎耶を抱いて立つてゐる。父を慕ふ卑彌子の泣聲が聞えた時には、自動車は既に進行しつゝあつた。

穴吹渡で乗合客を増した自動車は、間もなく清水越の坂路にさしかゝつた。急峻で裝の多い山腹を縫つて、道は斜に上つて行くので、危険な箇所が少くない。大正十年の春、私が自動車で初めてこの道を通つた時には、非常に危険を感じて、手に汗の握り通しであつたが、その後往復數回、今では馴れて了つて、何等の危険をも感じなくなつたのは不思議である。

午後七時、自動車は高松の築港に着いた。直に大阪商船會社の待合室に入つて、別府行の赤切符を買ふ。發船までにはまだ二時間もあるので、トランクを一時預けにして附近を散歩する。さゝやかな街ではあるが、築港前の廣場は

流石に賑しく、電燈の光に浮出てゐる店屋々々の看板や賣品も旅客の心をそゝるに十分である。私はみづ／＼しい水蜜桃が青白い電燈に照されてゐる一軒の店に入つて、水蜜桃を食べた。それから同じ店に陳列されてゐる折詰―美しいデッテルで包装された折詰の辨當を取つて夕食を済ました。それから築港の方へ出てみる。鐵道院のそれと、商船會社のそれと、二つの棧橋が港に浮んで、無数の電燈が水に映つてゐる。そのどちらにも可なり大きい汽船が横づけになつて、乗り降りの旅客が雜沓してゐる。暫く旅に出なかつた私の心は、いつしかこの珍しい夜の港の光景に征服されて、旅だ、旅だといふ一種の愉快な氣分が胸に起るのを感じた。

## 二 むらさき丸

別府行の汽船むらさき丸は、八時半過にやうやく入港してその巨艦を棧橋の側に横たへて、乗客の爲に梯を下したので、人人は先を争つて乗込むのであつた。私もトランクを片手に、群集に揉まれながら乗込んで、まづ船首の方の三等室に行つてみたが、大分混雑してゐて、適當な場所が見つからない。少時躊躇してゐると、

「艦の方がすいてゐます。」とボーイから注意されたので、直に船尾の方へ行つてみると、そこにも廣い三等室があつて、而も殆どがらあきの状態である。たゞ二三間おきに取付けてある扇風器の下に、乗客は五六人づゝグループをなして座を占めてゐるに過ぎない。私は或扇風器の下に、三人の男女―二人の紳士風の青年と一人の令嬢風の女とで一團をなしてゐる所を見つけて、その令嬢風の女の隣に席を取つた。

私は汽車は三等に乗つても、船は減多に三等には乗らないのであるが、この間H氏を訪問した時、この航路に経験

三

のある夫人に、船は何等にしたものかと相談してみると、

「別府行でしたら、紫にしても紅にしても、三等で結構でございます。」

といはれたので、それで安心して赤切符を買つたのであるが、成程この船の三等なら、阿攝航路の船などに比べて、確かに二等以上の価値がある。座には絨毯が敷かれてあり、天井も高く、電燈も明るく、扇風器も可なり澤山据ゑつけられてある。これなら一塵の紳士が乗込んでも、決して恥しくはあるまい。現にお隣に座を占めてゐる青年男女の如き、何れも常相に立派な服装をしてゐるが、この室に對して決して不似合ではない。

船はもう進行を始めたらしく、リズムの正しい機関の響が輕響として船腹の方から聞えて来る。

涼みがてら海上の夜景を観るべく、私は上甲板に上つて、そこに幾つも据ゑられてあつた藤椅子の一つを占領して好い氣になる。寶冠を飾る珠玉のやうに美しい高松港の灯は、次第に遠く薄れて行つて、左舷には坂出、丸龜、多度津あたりの灯が見えはじめる。右舷の方にも遠く、近く、賑やかな、淋しい灯が見え隠れする。何れは内海に散列する大小の島々の灯であらうが、一一何處と定めては知りがない。中には、海水浴場か遊園地かになつてゐる所と見えて、電燈が仕掛火花の色火のやうに美しくともされてゐる所もある。

空は晴れ渡つて、星は金砂を撒いたやうに輝く。海は静かで、船は油のやうな水面を滑つて行く。何といふ靜かな、惠まれた航海であらう。私は藤椅子に凭つたまゝ、いつまでもこの平和な海上の夜景を飽きず眺めるのであつた。

### 三 別府温泉

七月二十六日

別府が次第に近づいて、市街の光景も略看取されるやうになつた。

正面には素晴しく大きい山が聳えてゐる。地圖に引合せて見ると、これは鶴見岳といつて、標高は四千尺もある山らしい。その山裾が扇形に廣がつて、緩かな傾斜をなすつゝ、海岸に達してゐる。その山裾から傾斜地へかけて人家が次第に濃密になり、終に海岸に到つて繁華な街衢を成してゐる。その左には、二千尺もあらうかと思はれる勻配の急な山が海岸に突出して、市街の南方を限つてゐる。地圖で見るとこれは高崎山といふらしい。市街の右方即ち北方は平地續きになつてゐて、格別目だつ程の山も見えない。以上は海上から見た別府の概観である。その青々とした山や裾野を背景として、煉瓦造やコンクリート式の洋館が高低参差してゐる光景は、さながら一枚の水彩畫である。

「別府は好い所だ」といふことは、これまで色々の人々から幾回となく聞かされてゐたが、成程好い所に違ひない。この海上から見た風光だけでも賞揚するに足りる。況やそこには清麗な温泉が湧き、熱湯が噴いて、完備した設備が遊客を待つてゐるに於いてをやである。私は甲板の欄に倚つて、刻一刻と近いて来る未知の境を眺めながら、一種の好奇心の満足を感じざるを得なかつた。

午前九時、むらさき丸の船客は、別府の埠頭に吐出された。

私はこれから九州を横断して熊本に向はなければならぬので、別府に於ける遊覽は寧ろ歸路に於いてしたいと思つたが、折角こゝに上陸しながら素通りにするのも惜しいやうな氣がするので、ともかくも主要な街衢と、代表的な

温泉とだけはまづ一見一浴を試みることにして、例のトランクを汽船會社の荷物取扱所へ預けて街へ出る。會社の前を起點にして電車が走つてゐる。聞いてみると、別府大分間を往復するのださうである。

船着場の附近に砂湯といふのがある筈で、繪葉書でみると、數多の美人が、海岸の砂原で、砂をかぶつて一列に仰臥してゐるのがある、これ見落す可からずといふ譯でもないが、あまり廻道にはならないらしいので、序に見て行かうと思つて、地圖によつてそこらしい所へ行つてみると、そこには、石垣の際まで湛へてゐる海水の中で、十數名の河童のやうな少年が、モチヤ／＼と泳いだり、悪戯をしたりしてゐるだけで、砂原もなければ、砂をかぶつてゐる人もゐない。聞いてみると、今は潮が満ちてゐるから駄目だが、潮が干れば砂湯をする客が多くそこに集るのだといふ事であつた。

「こゝからあまり遠くない所で、相當に綺麗な共同温泉に這入つてみたいのですが、何所が宜しいでせうか。」と私がたづねた。

「さうですね、竹瓦温泉ならついでその邊ですが、設備の整つてゐるものでしたら、少し遠いですが、不老泉が宜しいでせう。」と四十恰好の紳士風の人が、押してゐた乳母車をとめて答へた。

「別府で一番賑やかな通はどこですか。」

「この向ふの角を右へ曲つた廣い通で、これから不老泉へ行く道になつてゐます。その通を四五丁お登りになつた所で右へ曲つて、二三丁おいでになれば、不老泉の前へ出られます。」

「さうでしたか、有難うございます。」

私はその教はつた大通を、山手に向つて歩いて行つた。電車はないが、町幅の廣い堂々たる通である。両側の商店には、陶磁器、竹細工、藤細工、絞染等、多く浴客本位の賣品が並べられてある。その絞染―所謂温泉染の浴衣やタオルの模様の華麗なものも温泉町らしく面白。

今日も快晴で、太陽は朝から灼くやうに照る。不老泉まで、七八町の道を歩く間にワイシャツは汗でビショ濡になつて了つた。

不老泉は思つた程荘麗な建築ではなかつたが、内部の設備は比較的整つてゐるやうであつた。まづ右造の門を入ると、正面に出札所がある。こゝで壹等貳拾五錢の入浴料を拂ひ、腕時計を預けて、その證に金の指輪を買つてはめる。壹等客の出入口となつてゐる大立開で靴を預けてスリッパを穿くと、仲居風のウェイトレスが出て来て二階の廣間に案内する。そこには幾團かの浴客が思ひ／＼に座を占めて休憩してゐる。中には若夫婦に老母といふ家庭的なものもあるが、中にはまた商人風の二三人で、ビールを飲みながら女給にからかつてゐるやうなものもある。私を案内して来た女は、私を縁側に近い床の前に坐らせて、煙草盆をすゝめて立去つたが、間もなく茶を持って来てすゝめ、更に浴衣とタオルとを持つて来て、「浴場へ御案内致しませう。」といつて手をつかへた。僅かに貳拾五錢の入浴料で、これだけの待遇を受けようとは、豫期しなかつた所である。

それからまた案内されて浴場に行く。そこはすべて和式木造で、あまり見榮えがしない。都會に於ける普通の錢湯

に比べても少しく見劣りがする。浴槽の如きも、もう大分古くなつてゐるやうである。門や大立關などの構が相當に立派であつても、肝心の浴槽がこれでは感心出来ない。これが若し別府温泉の代表的なものであるとすれば、道後や有馬に比して、別府温泉の設備は遙かに低級であるといはざるを得ない。併し浴槽に湛へた湯だけは流石に綺麗で、その中に身を浸して、頭を湯舟の縁にもたした時の心地は決して悪くない。

その浴室の一方のドアを押してみると、その外には、白布の日覆の下に小さい浴槽があつて、湯と共に黒い砂が入れてある。つまり人工的の砂湯である。例の繪葉書以來、砂湯といふものに一種の好奇心を持つてゐた私は、直にその砂湯の中に入つてみた。併しその砂は何だかどろ／＼としてゐて氣味がよくない。考へてみると、この砂には毎日這入る多くの人々の汗や垢がまみれてゐるに違ひない……と、かう考へてみると急に厭な氣持がするので早速飛出して、もとの浴槽にかへつた。すると先刻までは他に一人の浴客もなく、自分一人で占領してゐたこの浴槽に、いつの間にか五六人の男が這入つて來てゐて、思ひ／＼に高話をしてゐるのであつた。

不老泉からの、歸り途、とある自動車會社の屋根看板を見ると、「地獄巡り自動車」とある。而してその左に「地獄巡りをなさずして別府を語る勿れ」とある。自動車賃はと聞くと貳圓、時間はと聞くと二時間、もう少しすれば發車するといふ。遊意大いに動いたが、それでは熊本行がおくれて了ふので、また歸りの折にとあきらめる。

#### 四 大分から竹田へ

別府を發した電車は、海岸傳ひに大分市へ入つて、停車場前の終點でとまつた。時に零時半で、竹田行の汽車の出るまでに、二時間足らずの餘裕があるので、まづ驛前のレストウラントへ這入つて晝食を取る。

この大分には河野寅藏君が、中學校の教頭としてゐられる筈で、若し中學校が驛の附近にでもあるのなれば訪ねて行つて、學校に居れば幸、居なければ小使にでも宿所へ案内して貰つて訪問してみたいと思つたが、聞いてみると、中學校へはここから二十町もあるさうで、一時間半や二時間の時間ではとても訪問出來さうでないので、遺憾ながら斷念した。

二時十五分、大飼線竹田行の汽車は大分を發して、まづ大分川を渡り、中判田、竹中あたりから大野川の沿岸に出て川を溯りながら次第に山の中へ山の中へと進んで行く。九州の中央部を横断しつつあるといふ氣分は漸く濃厚になる。

沿線の農家を觀るのに、すべて古式の草葺で、太古の生活を思はせるのも面白いが、殊にその納屋の様式が脚柱式であるのは、土俗學上見逃すべからざる資料であらう。尤も脚柱式といつても、全部脚柱式になつてゐるのは寧ろ稀で、一側或は相接する二側は、段畑の石垣などを利用して家の重みをそれにもたせ、他の三側或は二側を脚柱式にしたものが大多數で、これが普通の様式になつてゐるやうである。その床下は爲市場に利用されるらしく、そこには礎が敷かれたり、爲事道具が取散らされたりしてゐる。日本に於けるこの種脚柱式の建築が、南方系の文化に屬するものであり、一面水上住居の土俗とも密接な關係を有するものであることは、私が嘗て人類學雜誌などで論じた所であるが、こゝにまたその研究資料の一分布を發見したのは、私にとつて豫期しない獲物であつた。



山は迫り、谷は盛つて、殖えるものは鐵橋と隧道とであるが、このあたりの隧道は、この地方固有の一種の節理を有する硬質の火山岩の斷崖を貫穿したもので、その工事には、よほどの勞力を要したに相違ない。而もこの種の隧道が、うるさいほど次から次へと出て來るので、この線の開通がいかに多大の時日と經費とを要したかゞ察せられる。而してこの線の布設を決定した、當時の爲政者の英斷と、これを實地に設計し、竣功せしめた技師の辛勞とに對しては、大に敬意を表したいやうな氣持もするが、たゞそれが難工事の連続であるだけそれだけ、肝心の汽車の速力の遅いには閉口する。我が徳島線なども随分遅い方であるが、而もこの徳島線に比べても遙かに遅いことが、目に見えて感ぜられるほど、この汽車は遅い—いや遅いといふのよりはのろいといふのが適切である。

行けども山と崖と谷とばかり。この線の終点になつてゐる竹田は、豊後に於ける著名な城下で、今でも中學校、女學校その他各種の官衙もある程の名邑だと聞くが、それ程の名邑がこの山の奥にあらうとはどうしても信ぜられないやうな氣がする。それだけの名邑が開展するだけの平地が、どうしても有りさうに考へられない。それ程汽車は窮屈な山地ばかりを走つて行くのである。

汽車は可なり長い隧道から出て間もなく靜かに停車した。そこにはこの線としては珍しい程立派な驛があつて、前面は山や絶壁に囲まれて窮屈ではあるが、ともかくも山間に一席をなした土地がある。そこが終點の竹田であつた。こゝから自動車で八里の險路を突破して肥後の宮地へ出て、そこから再び汽車に乗つて、今夜の十一時までには熊本に着かうといふのが私の豫定である。

驛を出ると、驛前の廣場には四五臺の自動車がゐて、各々行先地を現した杖を掲げて客を待つてゐる。然るに宮地行を標榜する自動車が見えないので、不思議に思つて聞いてみると、宮地行の自動車は毎日三回出るが、二時半着の汽車に連絡するのが最後で、今は四時五十三分着であるからもう駄目、借切で行くか、明日の一番七時半着のを待つておかしなければ爲方がないとの事。私は豫てかういふ事があつてはならないと思つて、大分驛で切符を求めぬ前に、驛長に就いて質したのである。所が驛長の答は自信に乏しい、稍曖昧な應答ぶりではあつたが、多分この列車にも連絡するだらうとの事であつた。それで大抵大丈夫だらうと思つて乗車したのであつたが、かういふ事で今日の内に熊本まで行けないのなら、大分でゆつくり河野君を訪問して、今夜は別府に宿つて温泉場の情調も味ふことが出來たのに、こんな山間の避地で一夜を明さなければならぬのかと思ふと、がっかりして泣きたいやうな氣持になつて了ふ。

併し泣いても悔んでも、もう爲方がない。これから宿を探さなければならぬ。そこでトランクを驛へ預けて町の方へ出る。驛の廣場の前が大野川の上流で、深い溪谷になつてゐて鐵橋が架つてゐる。橋上に立つて眺めると、今自分が出て來た停車場の背後は、斷崖絶壁が屏風をひろけたやうに衝立つてゐる。その右手、川の下流の方を見ると、そこにも切立てたやうな巖壁が崖壘として、人を壓するやうに峙つてゐる。振返つて上流の方を見ると、眼界は稍開けてゐるが、山嶽が重疊して平野らしい所は少しもない。たゞ橋の正面、停車場と反對の方面だけには、さゝやかな平地があつて、そこが竹田の市街になつてゐる。何しろ山と岩とに囲まれた所で、かういふ所に、ともかくもこれだけの町が出來てゐることは、一寸奇蹟のやうに思はれる。

南宗畫家として有名な田能村竹田はこの町の出身ださうであるが、成るほど偶然ではない。この附近の山容水態それ自身が既に立派な南畫である。

橋を渡つて、町の大通を眞直に進む。街は道幅なども可なり廣く、思つたよりも立派である。

さてこゝで宿を探すについて思出すのは森林君のことである。森林君は先年我が脇町中學からこの竹田の中學に轉任されたので、まだこゝに居られる筈である。久し振で同君に面談するのも面白からうし、序に旅館の紹介を頼むのも可からう、ともかくもまづ中學校を訪問してみようといふ氣になる。

「中學校の方へはどう行きますか。」

「この通を三四町お出になつて、一寸したたらだら坂をお登りになると隧道があります。……」

「隧道とは、汽車のですか。」

「いや普通の人の通る隧道です。それを抜けるとすぐ中學校です。」

街の中に隧道があつて、中學校へ行くのにもその隧道を通らなければならぬとは、流石は竹田だと感心する。

教はつた通り、だら／＼坂を登つて、一町ばかりもあらうかと思はれる隧道を抜けて、少し下りると、中學校の門前へ出た。昇降口で二三度どなつて見たが誰も出て來ない。事務室らしい所、宿直室らしい所などを覗いて見たが誰もゐない。いくら休暇中でも宿直員が學校にゐないとは怪しからぬ。廊下を眞直に突きぬけると、校舎の裏手に小使室がある。そこを覗くと一人の生徒らしいのが、何かの荷造りをしてゐるらしい。

「小使さんはどこか外出でも、したのですか。」

「どうか知りません。」

「宿直の先生は？」

「知りません。」

「この中學校に森林といふ先生がゐられますか。」

「はゞ。」

「その先生のお宅はどの邊か知りませんか。」

「知りません。」

これでは手のつけやうがない。こんな事なら、夕暮前の貴重な時間を割いて、山越までして訪ねて來るのぢやなかつたにと、腹を立て、みても爲方がない。

あきらめて歸りかゝる玄關先へ、小使らしいのが歸つて來たので、聞いてみるとやはり小使であつた。この小使極めて丁寧な男で、「森林先生はまだこちらにお出での筈です、その邊の川縁へ出ればお宅の屋根が見えますから」といつて、わざ／＼四五町も自分を導いて行つて、川向の山腹を指しながら「あの山手に見えてゐる瓦葺が先生のお宅です。」と教へてくれた。

成程ねえ、一寸人を訪問するにも山登りをしなければならぬなんて、流石は竹田だと感心はしたものゝ、足は疲

れてゐるし、お腹は空いてゐるし、いさゝかうんざりせざるを得ない。といつて今更引返すのも残念である。しよける心を引立てつゝ、橋を渡つて坂道を登つて行く。「やあ」やあ」と互に莞爾する、妻君が出て来て「まあ、お珍しい」とこれも嫣然する。そんな場面を心に浮べながら、私は疲れた足を踏みしめ踏みしめ登つて行くのであつた。

併し空想は間もなく破れて了つた。今日はなんて間の悪い日だらう。森林君は休暇になるとすぐ家族全部で郷里へ歸つたさうで、目ざして行つたその家には、戸締がして錠がおろされてあつた。

元氣も體力も沮喪して了つてゐた私に、まだ一つの大爲事が残されてゐた。それは宿探しである。旅館の選擇といふ事が旅行者に取つて、一重大事であることはいふまでもなからうと思ふが、私はまた格別それがむづかしい方で、いかに疲れきつて居つても、行きあたりばつたりで泊り込むといふやうなことは、私には出来ない。私は更に勇氣を鼓舞しながら、竹田の町といふ町を歩き廻つて、あらゆる旅館を見廻つた後、一番泊り心地のよさうな竹ノ井旅館といふのを見出して、そこに一夜の運命を託することにした。

## 五 竹田から宮地へ

七月二十七日

驛前で、四五人の相客と共に、宮地行の自動車に乗つて、出發を待つてゐると、間もなく大分發の一番列車が着いて、群集が驛前へ吐出される、その中からオリブ色の登山服に登山帽、背囊から登山杖まで正式に潔々しく装つた一人の青年紳士が来て乗込む。これでわれ／＼の自動車は満員になつたので、直に發車する。

例の大通を右に曲つて玉來街道に出ると、間もなく巖壁に突當る、そこにも名物の隧道がある。隧道を出るとやゝ廣い平地があつて、郡役所、高等女學校などがある。こんな小さな町の中に、これほど隧道のある所も少からう。何しろ汽車で来るにしても、徒歩で来るにしても、入るにも出るにも隧道をくゞらなければならぬといふのだから珍しい。併し昔の城下時代には、それだけ要害がよくて便利であつたであらう。

自動車は間もなく國境の山路にさしかかつたが、勾配が急になると忽ち停車して進まなくなる。時には後戻りをしてさうになるので乗客は氣が氣でない。いつもはこんな事はないのださうであるが、今日は餘程自動車の機嫌が悪い。それで乗客は度々下車して歩かせられる。その内に運轉手は水漕に水が切れてゐることを發見してこれを補つたので、それから後は自動車も至極上機嫌で、警笛の音も勇しく、忽ちの内に國境を突破して、瀧室峠の頂上に達した。竹田からここまでの里程約七里、時間は、いつもなら一時間と四五十分位しかかゝらないさうであるが、今日は自動車に故障があつたので、二時間半を費して居る。

峠には一軒の茶屋があつて、そこには四五人の客が、われ／＼の自動車が着くのを待つてゐた。これらの人々は宮地方面から自動車でこの坂下まで来て、そこから徒歩連絡でこゝまで登つて来て、今われ／＼が乗つて来た自動車で乗つて、竹田方面に向はうとする人達である。われ／＼はそれを逆に行くので、こゝで自動車を下りて、坂下で待つてゐる宮地行の自動車まで、徒歩連絡で、十四五丁の坂道を下ることになつてゐるのである。

自動車を降りた人々は、思ひ／＼に坂を下りて行く。成程急峻な坂だ。これぢや自動車が通らないのも無理はない。

私は例の登山服の男といつの間にか懇意になつてゐたので、坂道も一緒に話しながら下りるのであつた。彼は今日阿蘇へ登るのださうであるが、單獨の登山は心細いので、私を道づれにしようとして、先刻から頻りに勧誘を試みてゐるのであるが、私は今日の内に熊本へ行かなければならないので、まだ決定的な返答を與へてないのである。

「お重いでせう、代りませう。」と、かういつて彼は再三私のトランクを持たうとしたが、私はいつも辭退した。それは若しも彼が筋骨の逞しい青年であつたなら、私はその好意を容れたかも知れないが、打見たところ、彼は寧ろ華奢な體格の持主で、その言語動作等にも、一種婦人に見るやうな優しさがある、このやうな人に自分のトランクを持たせる程私は邪見であり得ないからである。而もそのやうな華奢な體質でありながら、たゞ假初の道づれに對しては、どこまでも勞苦を分たうといふ精神を持ち得る彼の人格に對して、私は心から敬服せざるを得なかつた。

私は最初彼を相して、どこかの新聞社の探検員で、夏期の讀物として紙上を賑はす材料を供給させる爲に派遣された者でもあらうと推定したのであつたが、今やこの推定のプロバビリティーは餘程薄弱となつた。その謙讓で而も温厚な態度は、惡擦れがして而も傲慢なのが常である普通の新聞記者の態度としては受取れないからである。彼の態度は、寧ろまた世慣れない素封家の子弟を思はせる所が多い。ともかくも彼の身分は大なる疑問であるが、私は敢へてこれが解決を急がうとはしなかつた。それは彼の身分の如何が、自分にとつて格別重大な關係をもたらすべくも思はれなかつたのと、又一面、彼の身分の解決を得るには、同時に自分の身分の解決を彼に與へなければならなかつたからである。

坂は思つたよりも短くて、間もなくわれ／＼は麓の自動車の乗場に着いた。そこには一軒の待合所をかねた駄菓子

屋があるので、二人はその家の、道路に面した外框に腰を下して、汗を拭き／＼扇を使つた。自動車は來てゐるが、發車までにはまだ少し間があるといふので、茶を吸りながら休憩する。前面には高嶽をはじめ、阿蘇火山の群峯が、文字通りに天を摩して聳え立つてゐる。その中に白煙を吐いてゐるのは中嶽ださうであるが、こゝからはその、全形を見ることが出来ない。少し隔つた左手には根子嶽の怪奇にして而も莊嚴な姿も見える。

「いかにでございますか、お登りになりませんか。」と、彼はこゝでまた私を勧める。私は遊意が大に動いたが、ともかくも宮地に着いてから確答を與へることにした。

自動車は間もなく宮地の驛前に着いた。時に午前十一時。そこに櫻屋といつて、茶店を兼ねた旅館がある。二人はまづこゝに入つて、休憩しつゝ、登山の勝手を尋ねることにした。この家の主婦らしい女は、年はもう五十にもなりさうであるが、容貌の極めて端麗な、さうして言葉づかひの極めて上品な人である。

「この正面に煙を吐いてゐますのが中嶽でございます。左が高嶽で、右が杵島でございます。皆様が阿蘇へお登りになると申しますのは、つまり中嶽へ登つて噴火口を御覧になるのでございます。それはあなた遺作はございません。登り三時間下り一時間で、女でも小供でも登り降りするのでございますから、途中で別格の故障さへ起りませんでしたら、四時間で樂に歸られます。唯今十一時でございますから、今お登りになれば、少くゆつくりなすつても、四時半發の熊本行の汽車には十分間におあひになります。それに今日はほんとうによいお天氣で、今日のやうな日でしたら、案内者なんか無くつても、山の上で道をお迷ひになるやうな事は決してございません。」

これがわれ／＼に教へる女の言葉であつた。こゝで私も漸く登山決行の膽を固めて、「お供致しませう」といふ確答を彼に與へたのであつた。私のこの返答を聞いた彼が、隠しきれない愉快の情を、そのやさしい面に表したことはいふまでもない。

### 六 阿 蘇 登 山

私は急に忙しくなつた。まづとりあへず晝食を命じておいて、靴を草鞋に穿きかへる、トランクや、服の上着のボゲットから、貴重品や必需品を取出して身につける。あとは荷札をつけてこゝへ預ける。上着なしで登るつもりである。これで大體準備が出来たので、二人で一緒に食膳に向ふ。山の上で腹がへるやうなことがあつては一大事だと、互に注意しあひながら十分に詰込んで箸をおく。

「あの尾根づたひにお出でになるのをお間違へにならないやうに。」

といふ主婦の聲を後にしつゝ、二人は元氣に満ちた足どりで、素早へ線路を踏越えて、登山道を南へ南へと進んで行く。この登山道といふのが實にひどい道で、道といへば道であるが、實は谷の底のやうな所で、上手から流し出された火山砂と熔岩片とで自然に出来てゐる道である。その歩き難いことは夥しい、その上谷の底のやうな所なので、風通しが全くない。その蒸熱いこともまたこの上ない。阿蘇へ登るのは坊中から登るのが本道で、宮地から登るのなどは一種の裏道ださうであるが。成る程これは善くない道である。併し二十町ばかりも進むと、道は漸く山麓の森林帯に入つて、どうやら普通の歩き易い道となつたが、その代りに今度は道に勾配がついて來るので、何れにしても樂で

はない。

間もなく道は、焼石の磊々たる川原に横ぎられる。それを渡ると道の勾配は俄に急になつて、いよ／＼純然たる山道になる。

麓から十四五丁も登つたかと思ふ所に、登山者の爲に設けられた、形ばかりの休息所がある。こゝで二人は一休みながら北の方を振り返つてみると、山麓に開展する阿蘇平野を隔て、略高さの等しい一脉の連山が、われ／＼の方を中心にして、偉大な環状をなしつゝ、繞つてゐるのが認められる。それが阿蘇の外輪山であることは聞くまでもあるまい。地理書の教へる所によると、阿蘇火山は、その大なることに於て世界第一だとの事であるが、あれが外輪山だとすれば、成程實に素晴らしいものである。

「雄大なものですね。」

「雄大でございますね。案内記で見ますと、外輪山の周囲は三十里、その内部の火口を直径でいふと東西四里、南北六里、その火口原内に住する人口は四萬に餘るのださうでございます。」

「成程ねえ。あの今朝われ／＼が越えて來た瀧室峠といふのも、こゝから見ると、やはり外輪山の一部になつてゐるやうですね。」

「さうでございます、あの急な坂を下りたのは、つまり大阿蘇の火口壁を傳つて、噴火口内に降込んだことになる譯でいふことができますね。」

「やういふ譯ですね。」

二人はまた登り始める。

道は既に森林帯を脱して、火山特有の草原帯に入つてゐる。見る限りの尾根も谷も澤も皆青い苔や藓で覆はれてゐて、樹木らしい樹木は殆どない。坂は格別急勾配でもないが、一寸息を入れようといふにも日蔭が無いので閉口する。それに朝來の快晴で、照りはたゞく太陽の熱は草いきれになつて人の面に反射して來るので、その暑苦しいことは一通りでない。

この頃は暑中休暇でもあり、今日は殊に天氣も好いので、この日本的否世界的名山に登攀を試みる者は相當に多からうから、山も可なりに賑ふことであらうといふことは、登山前の私の豫想であつたが、私のこの豫想は殆ど完全に裏切られた。先刻麓から少し上つた所で、中學生らしい二人の男が下山するのに出會つた後は、われ／＼はもう何人にも出會はない。全山たゞ森閑として呼子鳥の聲も聞えない。頂上の方を見上げると、中嶽の一角は嵯峨として人を威嚇するが如く峙つてゐる。この炎熱に苦しめられながら、この淋しい山道を辿つて、あんな高い険しい頂上まで登つて行かなければならないのかと思ふと、ほんとに心細くなつて、出來ることなら、引返して歸りたいやうな氣もする。

それに考へてみると、私は今大なる危険を冒しつつあるのではないかと考へられる、といふのは、今自分はこの無人の山中を、善人とも悪人とも全く素性の分らない男と道伴になつて歩いてゐるのである。彼は一見紳士の如く、人格者の如く見えるけれども、それはことさらにそのやうに装つてゐるのではないと、どうして斷言出來よう。彼の行動には、疑へば疑はれる點が非常に多い。第一彼は私と道を歩くのに、決して私の前になつて歩かない。必ず私の

後からついて來る。彼の顔はなま白く優しさうであるが、眼だけは異様に光る。彼は金遣が荒い。坂下の駄菓子屋でも、驛前の茶店でも、先方の請求額以上、可なり多額の金を與へてゐるのを私は見た。登山に全く素人でありながら、新調の登山服で登山家を装つてゐるのをかしい。自動車で乗合せて以來、顯りに私を勧誘し、親切らしい言葉で私の歡心を買はうとしたのも訝しい。私がトランクや上衣を驛前の茶店に預けて、下山後一旦落ちつく所を定めてゐるのに對して、彼は背囊を驛へ持込んで、不要の荷物は凡て熊本方面へ前送させて、登山後の行動を自由にしてゐるのも、今にして考へると、そこに深長な意味があるやうにも思はれる。尤もこの事は善意に解釋すれば何でもないことであるかも知れない。といふのは、

これは書落して居つたが、驛前の茶店で二人が共議した時、私は阿蘇神社へも参拜したのであるが、この神社は日本的に著名な官幣大社で、宮地驛の北方（即ち阿蘇山と反對の方向）十町の地にある――まづ阿蘇登りの大役を濟してからにしたい、それで私は宮地から登つて宮地に下りることを希望したが、彼は阿蘇神社の参拜は望まないので、宮地から登つて坊中に下りることを希望した。結局登りは行動を共にして、歸りは追分で別れようといふことに妥協が出來たのであつた。

それで、彼が荷物を茶店へ預けないで、汽車に託したことは何の不思議もないやうであるが、それにしても、金と時間とに人並以上の餘裕を持つてゐるらしい彼にして、阿蘇に遊ぶ者の何人も必ず参拜する阿蘇神社を、殊更に度外する理由が不可解であるといはなければならぬ。かう考へる時は、彼が荷物を汽車に託して行動を自由にしたことは、

結局疑惑の一箇條に數へて差支ないことになる。まだある。茶店で私がトランクや上衣を預ける時、紙幣束その他の貴重品を手早く取出して、ズボンのポケットに忍ばせたのを、彼はその時側に居たから、知つてゐるに相違ない。尤もこれは別に彼を怪しむ理由にはならないが、併し彼が若し悪漢であつた場合、その悪行を誘發する究竟な動機となることはいふまでもあるまい。

かう考へ、かう疑つてみた時、私は危険が既に身邊に迫つてゐることを感じたのである。彼は今にも背後から、匕首で突きかゝつて来るかも知れない、或は頭を締めに来るかも知れない。彼はその上衣の下に、どんな武器を隠してゐるかも知れない。彼の持つてゐる登山杖は握り太の特製品である、あれには何が爲込んであるかも知れない。その尻金の部分が一寸ほど火箸の先端のやうに尖つてゐる、これは先刻休息してゐる時に見ておいたのであるが、あれで背後から盆の窪でも衝かれようものなら、たまつたものでない。彼はまたコダックだと稱して黒革張の小箱を持つてゐるが、その中にはどんな恐しい爲掛があるかも知れない。或は強烈な發電氣が收められてゐないとも限らない、或は強度の麻醉劑が貯へられてゐないとも限らない。彼は何時襲撃して来るかも知れない。而もこれに對して自分はどれだけの防禦力があるか。身には寸鐵をも帯びてゐない。實際ナイフ一本も持つてゐない。赤手空拳である。

これはまつたく危険なことになつた。といつて今更こゝから引返して歸るといふ譯にも行かない。それは彼が若し悪人であつて、自分をこゝまで誘き出したものとすれば、自分が引返さうといふ意志を發表することは、却つて禍機を早めるに過ぎないからである。若しまた彼が幸に善人であつたとすれば、折角道伴になつてこゝまで登つて來なが

ら、今更彼をこの無人の山中に見捨て、歸るといふことは非常な不道德でもあり、また情に於て忍びない残酷でもあるからである。してみるとはや引返す譯にも行かない。どこまでも引摺られながら登つて行かなければならない、運を天に任せながら。それにしても、せめては彼を先へ遣りたいと思つて、一二回それとなく機會を作つてみたが駄目であつた。半町まで進まない間に、彼もまた機會を作つて私の背後にまはるのであつた。

こんな暗闇も演じつつ、一方炎熱に苦しみ、山道に喘ぎながら、ともかくも七合目位までも來たかと想はれる時であつた。ふと上方から人の話聲が聞えて來たので、驚いて前方を見上げると、人影は見えないが、休息所の屋根らしいのが、一町ばかり向ふの尾根の上に見える。これに力を得て、疲れた足に速力をかけて、漸くそこへ辿りついてみると、果然、以前のと同一板造の休息所があつて、そこには一人の男が四五本のサイダーを並べてゐる、その前には、二人の登山者らしい男が腰をおろして休んでゐるのであつた。無人の境と思はれたこの山中で、懐しい人間の一群に出會つたばかりでなく、板屋根の蔭でサイダーを飲みつゝ、疲労しきつた心身を休めることが出来るのを見定めた時、私は心の中で「やれ助かつた」と叫ばない譯には行かなかつた。道伴の彼も決して不愉快さうな顔はしなかつた。

先客の二人は何れも商人風の男で、既に下山の途にあるものであつたが、われ／＼二人を迎へて懐しさうに話しかけた。われ／＼は微温いサイダーに喉を濕しながら、頂上の様子を聞くのであつた。

「今日は登山者が少いやうですが、もう頂上の方には、誰も登つてゐないやうですか。」と私は聞いた。

「さやう、先刻七八人ほど登つて居りましたが、それは坊中の方へ下りたやうです。」と一人の男が答へた。

「今日も格別少いといふ譯でもないでせうが、」とサイダー屋が口を出す。「大抵は坊中から上つて坊中へ下りますから、この宮地口はどうしても淋しいのです。」

「これから上に、もう休息所はございませんか。」と彼が聞くと、

「もうありません、途中にも頂上にもありません。」と登山者の他の一人が答へた。

これからは愈々ほんとうの無人の境になるのだなと、私は思った。

商人風の二人は間もなく下つて行つた。私は一つのベンチを占領して、それに仰臥して、出来るだけ疲勞を恢復しようといふ。さうして眠れれば少し眠つてみたいと思つた。私は睡眠が不足してゐる。一昨夜は船の中で十分に眠られなかつたし、昨夜はまた十一時頃から隣室が騒ぎ出して、午前二時に及んだ。二晩共に十分に睡眠が取れてゐない。それでこんなに疲れて元氣がなくなつたのに相違ない。私はベンチの上にぐつたりと仰臥して眼を閉じた。同伴の彼はサイダー屋を相手に、頻りに附近の山の名などに就いて話合つてゐるやうであつたが、その話聲は私の意識から次第に遠ざかつて行つた。

半時間あまり経つて後、われ／＼はそこを立つて更に頂上に向つた。私の疲勞はすっかり癒えて、身も心も軽くなつた。私は全く別人のやうに元氣づいて來た。併し場所が場所であるから、例の道伴の男に對する警誡は尙忘る譯には行かなかつた。その時私は右の手にサイダーを一本提げてゐた。私は、これは頂上で飲むのだといつて、休息所を立つ時に更に一本買つたのであつたが、實は萬一の場合、これを以て敵に當らうといふのが私の心底であつた。サイ

ダー屋の一本が、武器として果してどれ程の効力があるか覺束ないものではあるが、今まで全くの徒手空拳であつたのに對して、ともかくもこの一本を手にした私が、非常に心強く感じたことは事實である。

しばらく行くと小さな谷川があつて、絶え／＼に水が流れてゐる。併しその水は赤く濁つてゐて飲めさうにはない。この邊から、山は磊々として焼石ばかりになる。焼野が原といふ言葉があるが、これは全く焼石が原である。地面に土が無いので、道が怪しくなるが、幸に附近の青年團の奉仕らしく、一町おき位に小さな石塚を築いて道しるべにしてある。登山者はその石塚を追つて登ればよいことになつてゐる。

前方を望むと、頂上は既に眼前に迫つてゐる。二十町もあらかと思はれる前面には、一脈の巖壁が屏風を立運ねたやうに峙つてゐる。これは往時の火口壁の名残らしく、今では中嶽の最頂部になつてゐる。そのこなた少し手の右方には、なだらかな丘陵状の突起があつて、そこからは白煙が濃々として立昇つてゐる。それが現今の噴火口で、山者の最後の目的地點になつてゐることはいふまでもない。

道は決して單調なものではなかつた。或時は古い噴火口の跡らしい窪地へ下りこんだり、また或時は巨大な熔岩の塊を踏越えたりしなければならなかつた。このやうな道を行盡した所に、今度は火山灰で覆はれた丘陵状の突起に出くはす。それが噴火口の外縁であることは聞くまでもなからう。私は急いでそこに躡上つた。さうして前方を一瞥するや否や、振返つて彼に向つて叫んだ。

「早く來て御覽なさい、實に素晴らしいものです。」



あゝ何といふ莊観であらう。

うここには偉大な圓筒状をなして陥込んだ噴火口がある。直径は五町もあらうか、深さは二町を下るまい。この底部には二箇の噴泉穴があつて、そこからは白煙が濛々として上昇してゐる。その一方中央に近いものは、直径十間もあらうか、沸々たる熱湯は轟々たる響をたてて湧騰ること實に七八尺、噴上げられては崩れ落ち、崩れ落ちてはまた噴上げられる光景、凄絶、愉快、俯眺する者をして、思はず舌を巻いて後に辟易せしめる。今一つその右手にあつて、周壁に近いものは、中央のその如く沸騰はしてゐないが、その暗藍色を呈しながら盛に白煙を揚げてゐる所に一種の無氣味さはある。

「素晴らしいものでございますね、實に。」と後から上つて来た彼も叫んだ。

更に眼を轉じて、噴火口内の周壁を見廻すと、その何れの部分も、文字通り切立てたやうな斷崖をなしてゐて、遙かに底面の火山灰に接してゐる。人が若し一步を踏み進らして、口内に轉び落ちてもしようものなら、それこそ最期で、周壁の途中でひつかゝる場所もなければ、踏止める方便もない、一瞬の間に底面の灰上に落ちて、たとひ熱湯中には陥らなくても、口内の熱氣と悪瓦斯とで忽ち寒殺されて了ふであらう。こゝに居てさへなま温い硫黄の臭氣が鼻をつく。怖しい。怖しい。減多に縁へは寄りつけない。

ふと後の方を見ると、少し隔つた見晴しのよい所に、二人の男がしゃがんでゐて、その前にはサイダーや繪葉書が並の上に展げられてゐる。われ／＼はその筈の端に腰を下して休憩した。彼は頻りに繪端書を買込んで、そこに備へてある阿蘇登山記念のスタンプを押すのに餘念がない。私は提げて来たサイダーを煽りながら二人の男に話しかけた。

「實に怖しい所だね。これがほんとの地獄といふのだらう。」と私がまづ口を切ると、

「今日は近頃にならない静かなお天氣で、穴の底がほんとはよく見えます。こんな日は全く珍しいです。」と年を取つた方がいふ。

「ふだんはかうは見えないかね。」

「減多に見えません。少し風でもあつて御覽なさい、とても穴の縁へは寄りつけませんからなあ。」

「この間も熊本の或會社の人達が二十人ばかりも登つて來ましたが、」と若いのがいふ。「その日はちやうど向ふ風がきついで、とても五町と近づけんのです。尤もそれは向ふの方の煙ですがね。」と顔を右へめぐらして、五六町隔つた南方の噴煙を眺めながら、「とう／＼諦めて歸つて行かれましたよ。」

「それぢや僕等はちやうど好い日に登り合せたものでございますね。」と、スタンプの手を休めて、彼は私を顧みるのであつた。

二人の男の話によると、われ／＼が今見たのが中嶽の主噴火口で、この南方に噴煙を揚げつゝあるのは新噴火口であるが、主噴火口がもう格別の活動もしなくなつたのに對して、新噴火口は時々大活動をして、火を噴き石を飛ばすことが珍しくないとの事である。

われ／＼は主噴火口の縁邊を周りつつ、更に新噴火口に向つた。途中、五六名の登山者の一團に出會つたが、何れも百姓風の男ばかりであつた。先刻の休息所で逢つた二人の男といひ、何れも町人階級で、洋服階級の登山者の少いのは不思議である。

所謂新噴火口は主噴火口に連接してゐる南方にある。その規模は主噴火口に比して遙かに小さく、恐らくはその二分の一に過ぎなからうが、口内は非常に複雑になつてゐて、その幾度も盛んに活動した名残をとどめてゐる。その烟を揚げてゐる局部は、口内に隆起する障壁のために遮られて、俯視することが出来ないが、その漠々たる噴煙を天に沖せしめてゐる光景はまた實に偉観である。更にその右手の周壁に近く、稍盛んに煙を噴いてゐる一穴がある。われ／＼はそれを俯視すべく、斷崖に近づかうとしたが、その附近は火山灰の堆積が格別に深く、殆ど膝を没するばかりなので、よほど冒險的に、先に立つて進んだ私も、遂に斷念して引返した。

これで噴火口の見學もまづ遺憾なく終了した。而も普通の登山者に比して十分以上の觀察が出来て、豫期以上の收穫を得た譯である。時に午後三時であつた。

われ／＼は非常の愉快と満足とを以つて、まさに下山の途に就かうとした。恰もよし、先刻主噴火口の邊で知合になつた若者が來合せて、下山の道案内をしようとの事であつた。

「坊中へ下りるにしても、宮地へ下りるにしても、とにかく山上神社までお出になるのがよろしく。」といつて、若者は、われ／＼が登つて來たのとは全く違つた方角へわれ／＼を導いた。そこは俗に千里ヶ濱といふ所

ださうで、見渡す限りの地面はすべて火山灰で覆はれて、所々に石ころが交つてゐるばかり。若者の話によると、これらの石ころは皆彼の新噴火口から噴上げたもので、ついこの間も、新噴火口が鳴動して、灰を吹き石を吹いたが、その吹上げられる無数の石と落下する無数の石とが相衝突して、空中に凄じい音をたてたといふ事である。

道も何も無いやうな所を七八町も下りたかと思ふ所に、この山上に營まれたものとしては可なりに大きい神祠がある。これがいはいゆる阿蘇山上神社であつた。この神社は山上の噴火口を祀るのださうで、蓋し一種の自然崇拜に起因したものであらう。そこには立派な道が作られてあつて、山上本堂と稱する庵寺風の精舎もあり、四五軒の茶店もある。この噴火口に接近した山上に、ともかくもこれだけの繁落が存在してゐたことは、聊か意外であつた。

われ／＼はその茶店で休憩して、また飲みたくもないサイダーを飲まなければならなかつた。

同伴の彼はこゝで馬を賃つて坊中へ下ることになつた。私は豫定の通り徒歩で宮地へ下ることにした。私は汽車の時間が迫つてゐるので、一足先に出發することにして、最後の挨拶をした。

登り道に於て、私は彼に對して様々な疑念を抱いた。併しそれは決して私の悪意の發動ではない。たゞそこが無人の山中であるといふ觀念が私を臆病にして、萬一の場合を警戒せしめたに過ぎない。私は彼その人に對して決して悪感を持つたのではない。今別れようとしてこれまで塞きとめられて居つた彼に對する友情は、急に私の胸の中に溢れ出るのを覺えた。登り道に於て、彼は私の身元や職業を遠まはしに聞かうとしたが、私はたゞ四國の者で、所用の爲に熊本に向ふ者であるといふこと以外は答へなかつた。併しこゝで名乗らなければ人間ぢやないと私は思つ

た。私は「徳島縣立脇町中學校教諭」の肩書のある名刺を出して、最後の挨拶を述べた。彼は私の名刺を一瞥して、稍物足りないやうな表情をほのかにその面に現したが、それでもすぐ丁寧な態度になつて、

「私は、唯今名刺を持合せませんで失禮でございますが、毎日電報社の門司の支局に勤めて居ります某と申すものでございます。今日はいろいろお世話になりました。お蔭で非常に愉快でございました。どうか御機嫌よく。」と挨拶した。

やつぱり新聞記者であつた。併しそれにしては珍しく濃厚な人である。

私はまた無人の山中に、今度こそはほんとうの一人ぼつちで放り出された。

汽車の時間は迫つてゐるし、何だか無氣味でもあるし、私は全速力で山を駈下つた。櫻屋の主婦は下り一時間といつたが、この位の速力なら四五十分の間に下りて了ふだらうと考へながら、一所懸命に駈下つてゐる内に、いつの間にか道を間違へたらしく、宮地道からはあまり眼近くは見えない筈の烏帽子嶽や杵島嶽がつい鼻の前に見える。それのみならず、山下の平野を眺めてみると、宮地の方へは餘程遠ざかつて、坊中の方に近づいてゐる。これは坊中道へ出てゐるわいと思つたがもう駄目である。何しろ道を聞かうにも善後策を講じようにも、肝心の相談相手のない無人境だから爲方がない。

一時間半も駈下つて、餘程平地が間近くなつた所に、一軒の茶店がある。四時半の汽車にはもう駄目とあきらめをつけて、そこを縁臺に腰をおろす。またサイダーでもあるまいと思つて、「阿蘇の雪」といふ菓子を取つて茶を飲む。

茶が熱くてうまいので幾度も急須に湯を注いで貰ふ。ふと道路の向ふ側に立つてゐる大きな標柱を見ると、

#### 秩父宮殿下御休息之所

とある。主人の話によると、殿下には今年の二月、尺餘の積雪を冒して登山遊ばされたのださうである。殿下の活潑にして剛健な御性格は、今更ながら敬服の至りである。それにしても、殿下が御休息になつた同じ場所、今自分が休憩してゐるのだと思ふと、何だか勿體ないやうな感に堪へなかつた。

翻つて山手の方を見ると、中嶽の山頂は悠然として靜かに噴煙を揚げてゐる。かつここから眺めると、頂上までの登山道が大體一目に見渡される。蓋しこれがこの坊中口の特長であらう。宮地口の如きは、殆ど山頂に接近するまでその山頂の噴煙を望むことが出来ない、のみならず、登山道もまた坊中口のその如く一目明瞭でない。以前は坊中口と宮地口とが、互にその表口たることを争つたこともあるさうであるが、今は鐵道省が坊中口を取つて表口に定めたといふ。蓋し至當の解決といふべきであらう。但し宮地には阿蘇山と離るべからざる、而して日本の名勝ともいふべき阿蘇神社があるので、これを無視する譯には行かない。されば坊中が表口であるとしても、下山の際は宮地口へ下りて、この神社を参拜するのが最も穩當でかつ便利な探勝法であらうと思ふ。

山道を下り盡すと、道の左側に可なり宏莊な寺院がある。由緒がありさうに思はれたので、僧房の方へ廻つて、瀟洒な庭園を眺めながら、佳職の話を聞く。その語る所によると、この寺は西嶽殿寺といつて、聖武天皇の御代に唐人の榮最讀師が創立したもので、古くは中嶽の山上、山上神社の附近、今いはゆる本堂のある位置に在つたのであるが、

後にこゝに移したのださうである。さればこれまた阿蘇山とは深い因縁のある寺で、阿蘇に登る者の必ず訪ふべき一名勝といはなければならない。尙この寺には寶物殿があつて、有志の觀覽を許すとの事であつたので、早速そこへ案内してもらつた。そこには後奈良天皇宸筆の誓若心經、懷良親王の佛舍利添狀等の國寶をはじめ、佛像、刀劍、器物、古文書等の見るべきものが少くなかつた。先には秩父宮殿下御休息之所に類うて、勇壯な殿下御登山の光景を忍び奉り、今はまた山緒あるこの寺に詣でて稀觀の寶物を觀た。これらは何れも坊中口へ下りた爲に得られた幸で、私は山中で道を踏違へたことを、今では却つて喜ぶのであつた。

坊中から一里の縣道を東進して、宮地驛前の櫻屋へ歸りついた時は、午後の七時に近かつた。時間表を繰つてみると、八時四十分の熊本行があつたが、その列車は十一時四十分にもならなければ、熊本へは着かないのである。私はその汽車に乗つて熊本に向ふにはあまりに疲勞してゐた。その上明日は阿蘇神社の大祭で、有名な御田植の神事がある。その神輿渡御の行列は非常に珍しいもので、歴史家殊に古代風俗の研究者は是非見なければならぬものである。ことを西巖殿寺の住職から聞かされた。これまた見ざるべからずである。

私は汗と膏とに塗れた族装を、この櫻屋に解くことにした。

## 七 阿蘇神社參拜

七月二十八日

午前八時宿を立つて、阿蘇神社に參拜する。境内の森殿、建築の莊麗、流石に官幣大社たるに恥ぢない。當社の祭

神は所謂阿蘇大神即ち健甕龍命(神武天皇の孫、神八井耳命の子)外十二神である。而してこれに齋く官司は大神の子孫たる阿蘇氏(今男爵)であるといふ。今日はちやうど當社の大祭たる御田植神事のある日で、境内境外共に朝から非常に賑つてゐる。

祭式は既に始つてゐるらしく、囀々たる奏樂の音につれて、盛装した神官等が本宮拜殿の階段を恭しく上下する。その前には奉幣使をはじめ、禮装の人々が両側に居流れてゐる。見物者參拜の老若男女が更にそれを取圍んで拜觀してゐる。

本宮の左に更に一神殿がある。そこには神社の寶物が展覽されてゐる。私は拾錢の拜觀料を拂つて中に這入る。古文書、古畫、古器物等が御殿一杯に陳列されてゐるが、月山牡丹作の太刀(國寶)、蜀江の錦(明太祖より征西將軍に奉つたものといふ)、下野狩繪掛物等は、當社の社寶として有名なもので、拜觀者の人氣を集めて居つた。これらの寶物は、平常は殆ど絶對に、誰にも見せないのだといふ。昨日の西巖殿寺の寶物といひ、今度の私の旅行は、よほど寶物に縁があるらしい。

間もなく境内の一部から、

ドンツク、ドンツク、ドンツク、ドンツク、ドンツク、ドンツク、

といふ勇ましい大太鼓の響が聞えて來る。それ神輿の渡御だといふので群集がその方へ集る。行つて見ると異様の装束をした老若男女が數百人、今行列の勢揃をしつつあるのであつた。私はそれらの役々に就いて説明を求めようと

して、傍に居る人の誰彼なしに話しかけて質問を發するのであるが、満足に答へてくれる者が無い。誰か適當な説明役になつてくれる人はいないかと物色してゐると、中年の官吏風の男が二人ばかりで頻りに俳句の話をしてゐる。これなら解るだらうと思つて、ぶしつけに質問を始める。流石は俳人だけにおぼつかないながらも、大體だけの説明をしてくれる。

白装束の婦人が十四五人、おの／＼行器のやうなものを頭に戴いてゐる。聞いてみると、戴いてゐるのは行列の一同を賄ふ辨當で、頭に病氣のある婦人が志願して、この行列の辨當持になるのださうである。すると頭の病氣が治るといふ。

周圍に垂のある蒼笠をかむつて、縹色の振袖に緋の袴をつけてゐる可愛らしい少女が二人ゐる。聞いてみると、これは早少女で、行列中重要な役目である。昔は二十人も出たさうであるが、今は略されて二人になつてゐる。いよいよ行列で練出す時は、彼女らは馬に騎つて行くのだといふ。

折鳥帽子をかむらせて、白張を着せた男女の人形一略等身の人形が目につく。これは田男と田女だといふ。尙作り物では大きな牛の頭や獅子の面などもある。

十人ばかりの青年が、揃ひの服装で、馬簾のない纏の頭みたやうなものを銘々に持つてゐる。これは何だか尋ねても要領を得なかつた。何れ行列の威勢を張る旗差物の類であらう。

その他様々な人が様々な物を持つてゐるが、一々尋ねみても明答を得ることの出来ないものが多いのは遺憾である。

ともかくも珍しい行列である。何れ識者にも尋ねて、緩り研究してみたいと思ふ。

やがて行列は、猿田彦神を先頭に練出した。

ドンツク、ドンツク、ドンドン。

の太太鼓の音は更に勇しくなる。見ると直径五尺もありさうな太太鼓を數人の男に擔がせて、一人の大男が棒のやうな棒で力一杯に打つてゐる。

行列が二町ばかりも進む、その後には四座の神輿が白張の熊輿丁に擔がれて練出す。神輿の後には阿蘇男爵以下五人の盛装した神官が何れも騎馬で扈從する。實に盛んな行列である。

行列は宮地の町を出離れて廣闊な田圃に出る。それから四五町ばかり進んで「一ノ御田」に着く。そこには田の中に大きな萱葺の假屋がある。四座の神輿は一先その假屋の中に奉安されて、暫時休憩といふことになつた。時に十一時半である。

こゝで行列の一同は辨當を食べて、それから愈々御田植の神事が行はれ、尙「二ノ御田」へも神幸があるとのことであるが、私は今日は午後一時發の列車で熊本へ行きたいと思つてゐるので、その神事の拜觀は遺憾ながら割愛することにした。尤もその神事といふのは神輿に稻の葉を投げかけて、その葉が御輿の屋根に多くとまるか否やでその年の凶豊を占ふだけの事で、いはゞ飽氣のないものださうである。ともかくも今日のお祭の觀物は渡御の行列であるとの事を人から教へられたので、私もこゝでまきらめをつけた譯であつた。

## 八 宮地から熊本へ

三六

参拜歸りの群集に揉まれながら、私は辛うじて一時十五分發の汽車に乗込んで、熊本に向つた。汽車は所謂阿蘇谷の火口原を西に向つて縦走する。左側の車窓から眺めると、昨日踏破した中嶽を中心にして、根子、高岳、杵島、烏帽子等の、所謂阿蘇の五嶽が嶺巖突兀として互にその秀を競つてゐる。而も汽車の進行につれてそれらの山容峯影が刻一刻に變化するの面白い。

立野の附近に至つて、汽車は忽ち外輪山の西壁に直面する。そこには白川の火口瀬が、山壁を突破して所謂立野の切所が出来てゐる。汽車はその切所に沿ひながら山側を下り、N字形の線路を除行して立野驛に停る。附近には數鹿流瀧、白糸瀧等の名勝もあり、地文學上見學すべき所も少くないやうであるが、下車する餘裕は勿論ない。

汽車は大阿蘇西方の郷野を下つて、熊本平野に出る。窓外の風光はもはや平凡となつて了つて、汽車の速力の遅いのが今更のやうにもどかしく感ぜられる。汽車はいつまでも、單調な田圃の中をゆる／＼と走る。私は早く熊本城の雄姿を遠望したいものだと思つて、幾度も、車窓から頭を出してみたが、いつも失望するばかりであつた。

## 附

### 阿蘇神社御田植神幸式行列次第

阿蘇神社の御田植の神幸の行列に就ては、私の概見した所を本文中に記しておいたが、その列順に就て更に詳細に

知りたいと思つて、歸來二三の参考書を調べて見たが、それらの書籍に載せてあるのは何れも舊記に屬するもので、現今のものとは多少の異同があるやうに思はれる。例へばそれらの舊記には長柄二十一本とか、鐵砲三十挺とか、供僧三人などの目があるが、私の實見した所ではそれらしい物は見當らなかつた。勿論それらの舊時代に於ける状況も研究上有益なものではあるが、ともかくも私が實際に拜觀したものに就て知りたいと思つたので、特に阿蘇神社々務所へ照會してみた所、本年七月廿八日に行はれた同神幸行列の順序を可なり詳細に知らせて呉れた。よつて讀者の参考の爲に左にその概要を記載しておく。

### ○ 行 列 次 第

- |                     |                        |
|---------------------|------------------------|
| 一、前驅 神職             | 二、猿田彦大神                |
| 三、五色絹風神(一對) 白丁各一人   | 四、鹽水 神職                |
| 五、神鷹 白丁捧持           | 六、宇奈井(飯桶捧持婦女) 十四人      |
| 七、獅子(陰陽二頭) 白丁十六人    | 八、早乙女(乘馬、大傘) 口取白丁一人    |
| 九、早乙女(乘馬、大傘) 口取白丁一人 | 一〇、田樂(太鼓二人、調拍子三人、大傘一本) |
| 一一、大太鼓 狩衣一人 白丁四人    | 一一、田男(人形) 白丁一人         |
| 一二、牛頭 白丁一人          | 一四、田女(人形) 白丁一人         |
| 一五、神馬 口取白丁一人        | 一六、神馬 口取白丁一人           |

三七

- 一七、金幣 白丁一人
- 一九、四ノ神輿 駕輿丁十一人
- 二一、鉾 白丁一人
- 二三、金幣 白丁一人
- 二五、二ノ神輿 駕輿丁十一人
- 二七、鉾 白丁一人
- 二九、御太刀(神職乗馬捧持) 口取一人
- 三一、主典(正服乗馬) 口取一人
- 三三、禰宜(正服乗馬) 口取一人
- 三五、神幸式行列係地元町長
- 一八、鉾 白丁一人
- 二〇、金幣 白丁一人
- 二二、三ノ神輿 駕輿丁十一人
- 二四、鉾 白丁一人
- 二六、金幣 白丁一人
- 二八、一ノ神輿 駕輿丁十一人
- 三〇、御太刀(神職乗馬捧持) 口取一人
- 三二、主典(正服乗馬) 口取一人
- 三四、宮司(正服乗馬) 口取一人 從者一人 大傘一人

但し、右は神社から御田へ向ふ時の、いはゞ往幸の際の順序である。而してその還幸の際も大体に於て同様であるが、たゞ神輿及びこれに供奉する神官の順序が前の場合とは反對になつて、一ノ輿神、二ノ神輿、三神輿、四ノ神輿、宮司、禰宜、主典といふ順序になるのださうである。

以 上

524

442



終